

氏 名	陈 会 林
生 年 月 日	
本 籍	
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	人博甲第 11 号
学位授与の日付	平成 23 年 3 月 22 日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第 4 条第 1 項）
学位授与の題目	中国語仮定複句の語用論的考察 —対訳コーパスを用いた言語調査の結果に基づいた記述的研究 Pragmatic Study of Chinese Hypothesis Compound Sentences —Descriptive study based on the result of linguistic research by using parallel corpus—
論文審査委員	委員長 大 瀧 幸 子 委 員 新 田 哲 夫, 加 藤 和 夫 岩 田 礼, 柴 田 正 良

学 位 論 文 要 旨

本研究のすべての議論は、仮定複句分句間の接続関係を明示する関連詞の使用が義務づけられない、という中国語複句の個性を解明しようとして生まれたものである。日本人中国語学習者ならだれもが、関連詞の使用不使用が何に拠るものか、関連詞が現れない場合その接続関係が如何に伝達され、そして聞き手に如何に理解されるか、という疑問を抱く。いずれも母語話者の語感に頼ってじっくりと吟味しなければ回答が困難な問題であるため、われわれ中国人文法研究者による解答が求められるところではあるが、中国人文法研究者の関心領域から外れたせいか、参考となる先行研究が見当たらない。これこそ、中国語仮定複句の関連詞の考察を深めようとする筆者の決意を促した原動力である。

本論文執筆の前に、中国人母語話者を対象に三回にわたって大規模な言語調査を行った。本研究のすべての結論や提案は、インフォーマント調査の結果に忠実に依拠したものである。また、本研究の結論や提案を一般化するために、データ処理の手法として、統計的仮説検定の手法を採用した。それによって、語用論的なアプローチが常に抱えている問題——言語使用の個人差——を最大限に解消し、それらのデータの背後に潜んでいる（一般性の高い）特徴を抽出することができたと思われる。

本論文は全 6 章で構成される。各章の要点を以下にまとめる。

第 1 章では、中国語の句体系における仮定複句の位置づけと本研究の目的を紹介した。仮定複句の位置づけに関しては、仮定複句が偏正複句の下位種類であることと、中国語の仮定複句と条件複句が意味的にも形式的にも区別されていることを検証した。本研究の目的は二点ある。一つは、仮定複句における関連詞の使用不使用を決定づける話し手の動機づけを解明することである。もう一つは、関連詞が現れない場合の偏正複句内の接続関係の示し方と理解のメカニズムを解明することである。

第 2 章では、仮定複句の定義と分類を提案した。本研究は仮定複句を仮定世界でのある事象の成立に基づく推論と定義した。仮定世界は現実世界と対立する概念である。仮定世界と現実世界を規定するのに「確定性」という概念を導入した。「確定」とはその事象の実現が話

し手によって確かめられたことである。現実世界の事象をすべて確定の事象とし、仮定世界の事象をすべて非確定の事象とした。仮定世界の「非確定」の事象は、発話時点以降において実現するかどうか分からない事象、発話時点において既実現したまたは実現しているにもかかわらず話し手がその実現を確かめていない事象、発話時点以前において実現しなかった事象または発話時点以降においてその実現が見込まれない事象、の三種類に分けることができる。本章は、有田（2007）等の先行研究を参照し且つ三種類の非確定の事象と対応しながら、仮定複句を予測的仮定複句、認識的仮定複句、反事実的仮定複句の三つに分類した。さらに、本章では、坂原（1985）の「暗黙の前提」理論および対偶の手法を用いて、二種類のいわゆる特殊な仮定複句が通常の仮定複句に還元する（または帰属させる）ことができることを証明したことによって、上記三種類の仮定複句と区別して別の種類の仮定複句を立てる必要がないことを検証した。

第3章では、中国語仮定複句分句間の接続関係を明示する要素として、接続副詞「就」と連詞「如果」を取り上げ、それぞれの使用範囲と使用動機を分析した。

まず、接続副詞「就」の使用範囲に関しては、時間的用法と論理的用法があり、時間的用法が中心的用法であって論理的用法が派生的用法であることを見いだした。接続副詞「就」の使用動機に関しては、従属節事象と主節事象が時間的または論理的に接近していることを顕著に表そうとする話し手の心的態度に拠ることがあると主張した。ただし、文の意味上の理由のみでなく文の構成上の理由によってその使用が不可欠とされることも少なくないため、接続副詞「就」のみに依拠して偏正複句分句間の（意味上の）接続関係を認定することが非常に困難であることを指摘した。

連詞「如果」の使用範囲を把握するため、パラレルコーパスを用いたインフォーマント調査を行い、その結果から「如果」が日本語条件表現の仮定的用法にしか使用できないことを明らかにした。具体的には、①「成立するかどうか分からない事象の成立を仮定」、②「反過去の事象を仮定」、③「反現在の事象を仮定」、④「反未来の事象を仮定」の四種類の意味について「如果」の使用許容度が非常に高いのに対し、⑤「相手が表現した事象が成立していると仮定」、⑥「未来に必ず実現すると思われる事象の成立を仮定」、⑦「話し手の基準で或る事象の実現を完全には把握できていないにもかかわらず、その事象が成立していると仮定」の三種類の意味について「如果」の使用許容度が大幅に低下していることが判明した。この結果を第2章で主張した仮定複句の三分類に当てはめることにより、予測的仮定複句（①）、反事実的仮定複句（②、③、④）に「如果」を支障なく使用できること、認識的仮定複句（⑤、⑥、⑦）に「如果」を使用するのとならないのとで複句分句間の意味関係が若干変化することを明らかにした。さらに、連詞「如果」の使用動機に関しては、予測的仮定複句、反事実的仮定複句への使用不使用が文体や修辞等の要素に拠ること、認識的仮定複句への使用不使用が従属節事象に対する話し手の認識の仕方に拠ることを結論づけた。以上の考察結果により、本研究第2章で提案した仮定複句の三分類が連詞「如果」の使用範囲と使用動機を分析するのに非常に効果的であるという裏づけを得た。本章でさらに強調すべきことは、多義複句に用いられる連詞「如果」の意味を解明したことである。すなわち、単義複句に用いられる連詞「如果」と異なって、偏正複句分句間の接続関係を強制的に決定づける役割を果たす、という点である。

第4章では、関連詞が中国語仮定複句に用いられていない場合、その接続関係が如何に伝達され、そして聞き手に如何に理解されるかを考察した。

偏正複句の接続関係を暗示する要素を、文脈要素、語彙要素と音響要素の三種類に分けた。文脈要素、語彙要素に関しては、これまでも様々な角度からの先行研究があったが、本章ではインフォーマント調査を通してそれらの先行研究の成否を検証した。その結果、文脈要素、

語彙要素（従属節の接続副詞、述語、指定表現、主語、時間名詞、時間副詞、アスペクト助詞、主節の接続副詞、アスペクト助詞、概言/定言副詞、能願動詞を含む）が偏正複句分句間の接続関係を暗示する機能を果たすこともあるが、機能しない場合も少なくないことが判明した。すなわち、これらの要素は偏正複句分句間の接続関係を決定づける際の一応の目安にすぎないということである。特に多義複句の弁別に文脈要素と語彙要素があまり役立たないことをインフォーマント調査の結果に基づいて明らかにした。

また、音響要素が複句の接続関係の弁別に果たす機能に関しては、管見の限りこれまで議論されたことはあまりなかった。本章では、a. 同じ接続関係を表すのに、連詞つきの状態と比べて、連詞なしの状態の韻律的特徴が如何に変化するのか、b. 多義複句内の異なる接続関係を表すのに、連詞つきの状態と連詞なしの状態とは、複句の韻律的特徴が同じ傾向の変化を示すかどうか、という二点の研究課題を設定し、収集した音声データに対する音響分析を行った。a の課題に対しては、以下の二点を明らかにした。①接続関係と関係なく、連詞つきの状態と比べて連詞なしの状態のほうが、音圧をより強く F_0 をより高く且つ発声時間をより長くする、という話し手による有標の韻律的操作が行われている。②有標の韻律的操作のなかで、発声時間より F_0 、そして F_0 より音圧のほうが接続関係を明確にする役割を果たしている。b の課題に対しては、以下の四点を明らかにした。①多義複句の異なる接続関係を伝達するのに、連詞なしの状態での F_0 、音圧と発声時間の各ペアの変化と、連詞つきの状態での F_0 、音圧と発声時間の各ペアの変化がほぼ一致した傾向を示している。②多義複句でありながら片方の接続関係が意味的に優勢であればあるほど音響要素による区別が顕著になる。③多義複句の異なる接続関係を伝達するのに、連詞つきの状態と比べて連詞なしの状態のほうが、有意差が見られた音節の個数が減少する。ただし、④連詞なしの状態の場合、複句前分句の句頭に置かれた音節の子音に偏正複句分句間の接続関係を決定づける韻律的特徴が現れる。

第5章では、中国語仮定複句の主節と従属節に現れる語気の表現手段を全面的に考察した。中国語の語気は、聞き手とのコミュニケーションの目的によって規定される機能語気（伝達）と命題内容に対する認識の仕方によって規定される意志語気（陳述）からなるとされている。本研究ではその中国語語気の表現手段を語彙手段、句法手段、音響手段の三種類に分けて考察した。

中国語機能語気の考察にあたり、（音響手段の）研究蓄積がある叙述語気と疑問語気に、命令・願望語気と詠嘆語気を加え、叙述－疑問、叙述－命令・願望、叙述－詠嘆、疑問－命令・願望、疑問－詠嘆、命令・願望－詠嘆の六ペアの用例（すべての用例は仮定複句の文である）を用意し、それぞれの機能語気のペアでイントネーションと重音（stress）による区別が見られるか否かを観察した。イントネーションの観察箇所を文末リズム単位とし、重音の観察箇所を（文末リズム単位を除く他の）すべての音節とした。その考察の結果、以下の四点を明らかにした。①文末リズム単位のイントネーションのみで、叙述－疑問、疑問－命令・願望、疑問－詠嘆、叙述－詠嘆の四ペアの機能語気を区別することができる。②文末リズム単位のイントネーションと重音を合わせて初めて、叙述－命令・願望ペアの機能語気を区別することができる。③音響要素のみで命令・願望－詠嘆ペアの機能語気を区別することは困難な場合がある。④仮定複句主節の述語構造およびその周辺の音節には勿論のこと、主節の述語構造との物理的距離が近い場合（特に緊縮句）には従属節の音節にも仮定複句の機能語気を決定づけるための重音が出現している。

以上の考察結果を通して少なくともいえることは、従来、語気と無縁とされてきた従属節内に命題内容に対する話し手の心的態度（意志語気）を表す音響要素が存在することである。多義複句に関するこの言語事実は、すべての偏正複句の従属節に少なくとも已然未然を決定

づける語気が存在することを示唆する重要な発見と言える。

さらに本章では、以下四つの根拠を以って、中国語仮定複句の従属節に用いられる連詞自体も一種の語気（従来の機能語気と意志語気の二分類に収まらない）を表す手段であるという解釈を示した。①認識的仮定複句に「如果」を用いるその動機は、話し手自身の従属節命題に対する（話し手と聞き手の間での）把握の仕方のずれを伝達しようとする心的態度そのものである。②仮定複句の従属節に用いられる連詞自体は中右（1994）のDモダリティ表現の認定指標にほぼ符合する。③連詞の使用不使用は文体や修辞等の要素によることがあり、且つ適度に連詞を使用することは相手に対する敬意を伝達することに繋がっていくこともある。④仮定複句の言いさし文における連詞がときに評価的感情を表出している。

以上のように、本研究は、第2、3章で検討した連詞の使用不使用の問題、第4章で検討した連詞不使用の際の話し手による有標の韻律的操作の問題を、第5章では、話し手の心的態度の観点、すなわちモダリティ論によって解決するべきだと結論し、そしてそれについて一定の確証を得た。

第6章では、本研究をまとめ、今後の課題を述べた。

Abstract

In Chinese hypothesis compound sentences, there is no obligation that the conjunctions, as the linguistic form indicating the relationships between clauses, must be used. The first purpose of the paper is to clarify the motivations which decide whether to use the conjunctions or not in the hypothesis compound sentences. The second one is to prove the conveyance methods and understanding mechanisms of the clause relations of the modifier head structure sentences without conjunctions. Concerning the first aim, this research, on the base of the result of informant investigation, confirmed that the motivations determining whether to use the conjunctions or not were different according to the lower types of the hypothesis compound sentences. Furthermore the motivations of each lower type were analyzed. About the second aim, this study classified the elements implying the relations between clauses of the modifier head structure sentences into three kinds: context element, vocabulary element, and acoustic element. Then examined these elements separately. By using the informant survey, this study proved the claim of the precedent study on context and vocabulary elements right or not, and then rearranged it. Regarding the acoustic element, this paper identified that in order to convey correctly the clause relations of the modifier head structure sentences without conjunctions the speakers were making markedness prosodic operations. Additionally, there were also analyses about the actual situations of these markedness prosodic operations. This study developed arguments and got certain verifications concerning, above all, the problem of motivations which decide whether to use the conjunctions or not and the problem of the markedness prosodic operations made by speakers when conjunctions are not used. It claims that the mentioned problems should be solved according to the psychology of speakers, that is to say, modality.

論文審査の結果の要旨

下記の如く課程博士学位論文審査要項（『人間社会環境研究科各種規定等集』平成 21 年度 pp73-75）の「6. 博士学位論文の審査基準と審査項目」に沿って、検討会および最終公開発表での議論を整理し、当該論文を金沢大学人間社会環境科後期博士課程から文学博士を授与するに値する論文と判定した。

評価基準（1）：本論文は中国語の順接仮定複句文の表現方法を分析することにより、将来的には中日両国語の対照研究の発展と中日両国語教育に貢献する意図をもって書かれている。中国人の日本語学習者にとって極めて習得の困難な日本語の表現法の一つに、仮定複句文を構成する接続助詞「れば」「たら」「と」「なら」の用法上の区別がある。なぜなら中国語の現代口語のなかでは順接仮定を表す場合に使用を義務づけられた単語がなく、明確に順接仮定を表している接続詞“如果 ruguo”も、使用するかないかは話し手の主観によって決定できるからである。この学習上の困難は日本人が中国語を学習する場合にも実は存在しているはずである。筆者は中国語のネイティブとして、中国語においても仮定複句文に数種類の意味の区別が存在し、単語形式を用いて表現せずとも話し手は何らかの方法を使い、自分の意図どおりにその異なる意味を聞き手に伝達している、と論じる。この前提にたち、本論文は中国語のネイティブが無意識のうちに区別している順接仮定接続の意味に 3 種類があると仮定し、それぞれの表現方法を確認するために、（1）接続詞“如果 ruguo”を使用する場合の動機づけ（2）接続詞を用いない場合に接続関係を区別しうる他の言語形式を明らかにしようと試みた。この研究テーマは従来学会で等閑視されてきた中国語の順接仮定接続の意味分析として、学会へ貢献しうる価値あるものと認められる。（以上第 1 章「序論」第 2 章「仮定複句の下位種類」の評価）

評価基準（2）：本論文の研究テーマを追求するためには、中国語ネイティブが無意識に行う表現方法を解明する必要がある。筆者はまず、東北地方の中国人大学生 178 名を被験者として、接続詞を使用した場合の意味解釈に関するアンケート調査を行い、次にその中の 86 名を選び接続詞を使用しなかった場合の意味理解に関する面接調査を行った。最後に多義文の可能性のある仮定複句文を資料として 76 名の被験者へ提示し、その中で多義であると回答した 21 名を対象として発音を録音し音声分析を行った。前 2 通りの言語調査では「推論統計」によるデーター処理を行い、両極端に位置する意味概念を 0 点と 4 点とし、中間をいれて 5 段階の評価尺度を設定して被験者に回答を求めた。このように定量的調査をもとに議論を展開した理由は、意味領域に関する議論を順接仮定関係について展開しては、対照研究として将来的にも充実した成果をあげるにいたらないことを予想したからである。その理由はつぎの 3 点に絞られる。（1）日本語学界で複数の接続助詞が表す機能的意味の役割分担について確固たる定説が成立していない。（2）中国語では接続関係を表す言語形式が少ないため順接仮定接続が中国語学界の研究対象とされることも稀であり、言語形式の用法列挙を凌駕する研究が見当たらない。（3）形式論理学において自然言語で利用されている反実仮想を説明するための仮想世界の定義づけに定説がなく、真理条件との不整合も未解決のままである。すなわち、異なる体系を有する複数の自然言語を比較対照して論じようとする場合に、本論文の研究テーマに関しては評価基準として用いることのできる普遍的な意味範疇を既存の学説のなかから選びだすことが極めて困難である。本論文が採用した「第一次資料を収集しつつ接続関係の意味を分析する」という方法は、アンケート調査資料を正文パラレルコーパスから慎重に取り出していることを含め、現在の学会の研究状況からみて最も堅実な分析方法として評価できる。

評価基準（3）：参考としてとりあげた先行研究は中国と日本において出版された著作が主

なものであり、それぞれ研究領域としては中国語学、日本語学に属している論考である。対照研究で通常参照されることの多い言語類型論が欠けてはいるが、筆者は言語の普遍的側面を検証しようとする論理学や、修士論文で扱った認知言語学の文法記述の発想を活用することを試みている。一部、「仮想世界」の理論的援用に成功しているとは言い難い面もあるが、著作の出版年代も 1930 年代に各国語学が独自性を主張し始めた頃の古典的著述から 2009 年の論考まで目配りが行き届いている。筆者が一貫した問題意識を持ち、学び続けてきた証拠といえよう。

評価基準（４）（５）：論述を裏付ける資料は、３度行った言語調査の結果（第一次資料）と、正文パラレルコーパス内の使用頻度である。これらの資料を議論の展開にあたり高い説得力を有する資料として評価する点は、主に以下の３点である。（１）自身で作成した「一つの中国語原文に対して４種類の日本語翻訳を並列させたパラレルコーパス」に検索をかけて、接続助詞を使わざるを得ない日本語の複句文の量を 100 とすると、中国語の相当する表現では接続関係を表す単語が一つも使われていない用例の量がその 60%弱に達すると指摘したこと。（２）特定の文脈のなかにある接続形式を含まない同一の複句文に対して「多義（逆接譲歩または順接假定）」と判定した被験者が被験者総数の 3 分の 1 近くいることを示し、かつその判断基準の内省報告では「未然：已然」の判定に大きな揺れがみられ、時に「順接：逆接」の判定にさえ揺れがみられることを示した。すなわち、使用単語の語彙的要因だけでは多義のどちらの意味であるかを決定づけられない場合があることを指摘した。（３）音声解析ソフト Praat による音響分析の結果、筆者がたてた３種類の順接假定接続の意味の区別に対応する音声的差異が文頭の接続詞“如果 ruguo”に現れ、かつ有意差検定によりその差が有意であることを示した。本論文は接続関係を暗示する表現効果が音響的要素にも託されている言語事実を指摘し、言語学会に有意義な情報を提供した。

評価基準（６）：本論文は第一次資料の収集と、それに対して統計的分析および音響計測の処理を加えることにより従来の学説では指摘されてこなかった幾つかの言語事実を指摘し、それに対する自説を展開している。したがって、その分析手法に未熟な点があれば本研究の結論にも疑義が生じ、論理展開の論拠も不安定なものとなる。以下、本論文の結論とそれを導くにいたる根拠をあげて学術的価値を評価するとともに、その論拠不十分な点および今後への課題について述べる。

（６－１）中国語の接続詞“如果 ruguo”は中日辞書の語釈には必ず「もしも」があてられる。しかし、それが中国語の体系のなかでどのような接続関係を表しているかについては、いまだ詳しい論考がなされていない。筆者は第３章において「①相手が表現した事象が成立していると假定、②未来に必ず実現すると假定、③話し手の基準である事象の実現を完全には把握できていないにも関わらず、その事象が成立していると假定」（①②③全て筆者のたてた順接假定接続３分類のうちの「認知的假定複句」に属する）での出現許容度が極度に落ちるという内省報告を得た。例えば日本語では「＜もしも＞何かわけがあるなら、はっきりおっしゃい」という表現は、すべての場面において＜もしも＞を使用する義務がないが、中国語では「何かわけがあると聞いているが」という前提の下（③の假定）で話す場合には、“如果 ruguo”の使用義務が生じる。この発見により、筆者は接続詞の用法分析として文脈分析の重要性を実証すると同時に、文が完成されていく途中でも、１種のモダリティ（話し手の内容に対する心的態度）が表現されるという主張へと議論を展開している。この議論により、順接假定接続に３種類あるとする筆者の仮説（他の２種類は「反事実的假定複句」「予測的假定複句」）が中国語の意味分析に有効な予測を与えうるものと評価できる。ただし、反事実的假定複句の定義付けを自然言語で行おとしているが、その用語の定義に厳密さを欠くために読み手の理解に混乱を招いている。今後、假定接続の意味分析をより厳密なモダリティ論、記

号論へと展開する前に解決せねばならない課題である。

(6-2) 本論文の第4章第5章では、接続形式を使用した場合と使用しない場合とで、前分句文頭部分と後分句文末部分の音調にどのような変化が現れるか、また、その変化が表そうとする話し手の意図はなにかについて考察を加えている。ただし、「声調言語とイントネーションとの相互関係」をどのように識別し、判定するかは音声学上未解決といってよい難問である。基本周波数 F_0 (Hz)、音圧 (dB)、発生時間 (ms) すべて、個人個人の声調の発声方法を特徴づける要素でもあり、その平均値の取り方には一定の手順を必要とするはずである。特に、 F_0 については被験者の最高音域と最低音域を個々に測定したうえで相互の関係を数値として係数化し、平均値を計算しなおす手順を踏む必要があり、今後、研鑽を積む必要が残る。また、音声は接続関係の意味の差を表す機能を担う事実があるとしても、その機能は「重層的な複雑な意味」ではありえない。その限界を明確にしていくこと、また、音声の機能を把握するために話し手に対して「その意図が明確になるように発音させる」という資料収集だけではなく、聞き手に対して「どのように理解したか」という調査を行って、自説を完璧に検証するという作業が残されている。

以上、審査委員から提出された今後の課題の概略を述べた。しかし筆者はすでに西安电子科技大学の人文学院で内定を得、大学院設立要員として激励を受けている。その勤務環境は、審査員からの再考を促す要求に必ず解答をだせるものであり、今後の研鑽に期待するものである。